

くまさんだより

豊橋東田教会 〒440-0055 豊橋市前畑町 112 ☎0532-54-3435
ホームページ toyohashi-azumadakyokai.org 武井恵一牧師 080-3428-3200

2018年

5月号

5月20日発行
ペンテコステ

イラストは全て池谷陽子さんご提供

5月6日 復活節第六主日礼拝説教

「光の子になるため」武井 恵一牧師

ヨハネによる福音書12章27～36節 192～193頁

❖エルサレムの三大祭りの内の最大の祭り、「過ぎ越しの祭り」が始まろうとし、大勢の群衆が全ユダヤ、イスラエルから続々と集まっている最中です。

先週は、その中にギリシアからやって来た「イスラエルの神」を信じている権威ある集団からの使者が現れ、主イエスに会いました。残念ながら、その詳しい様子は省略されています。けれども、これは、「エルサレム入城」での父なる神による「栄光」に続く、全世界へ宣教の道が示されました。主イエス・キリストによって開かれる「栄光」の具体的な徴です。

❖天地宇宙を創造された神のご計画は、はっきりと「すべての人間の救い」に向かって歩み出そうとしています。一方で、神の国の「新しい歩み」を留めようとする「反キリスト」への力、悪魔・悪霊たちの存在を含んで「父なる神様のご計画」を挫折させようとする神殿ユダヤ教の力が働いています。



❖彼らは具体的に「イエス・キリストを殺し、自分たち自身の権威、独善的な信仰でユダヤ・イスラエルを動かそう」と意図し、人々を動かそうと企てています。神殿ユダヤ教の首脳たちが暗躍している。

この時こそ、父なる神と主イエス・キリスト、聖霊による「福音」が新たな世に向かって現れようとするとき。

一方の悪の力、闇の勢力が全力を挙げて「福音」を妨げ、この世界を暗黒に落とそうと意図するとき。(主イエスはこの時)

ヨハネによる福音書12章27節

27「今、わたしは心騒ぐ。何と言おうか。『父よ、わたしをこの時から救ってください』と言おうか。しかし、わたしはまさにこの時のために来たのだ。 と言われました。

これは「人の子・神の独り子——神から、大計画実現のために遣わされたイエス・キリストの最大の苦難に向かう」時です。

❖ヨハネ福音書には「ゲッセマネの苦難」は記されていません。最後の晩餐も記されていません。けれども、「ラザロの復活」が主イエス・キリストによって行われ、多くの人々を動かし、ベタニアにおいて「今までになかった大きな業」として盛大な祝宴が開かれました。

この時は、ヨハネによる福音書による「最後の晩餐」です。

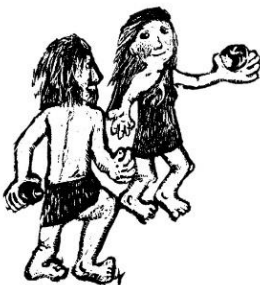
❖そして、すべての現実を基に、新たな「この世の初めから、人間が『自分を主にし、創造された神に背き、逆らい』反逆する罪」に対する三位一体の神様の「大計画」が実現しようとし、そのすべてが、その大きな困難と、反抗の苦難が、「苦悩として」主イエス・キリストご自身にその重さを現しました。

これこそ、ヨハネによる福音書での「ゲッセマネ」にあたる出来事です。

❖主イエス・キリストは、この神様の「大計画」が、ここで今、一人の人間イエスによってしか実現しない。すべての人間が積み重ね続けてきた「計り知れない罪の重荷」を取り除けるのは、父なる神から遣わされたイエス・キリスト自身しか存在しない現実があると知ります。

イエスご自身だけが、ただ一人「神の子・またたき人間」であって、今や「この重荷を受け、取り除くことができる『ただ一人の「人の子」』である歴史の現実がこの時、直面しています。

❖福音書記者ヨハネが、この「ゲッセマネ」を記さなければならない自分たち自身の重荷を負い、世界福音の端緒とも見られる「ギリシア人たち」と主イエスとの会合がどうであったかさえも触れることなくこの記事に向かったことが、その重さを現しています。



❖主イエスは「しかし、わたしはまさにこの時のために来たのだ。」と、はっきり自覚された。

父なる神は、この、御子イエス・キリストと一体になってご自身も苦悩を味あわれました。

それは、

ヨハネによる福音書12章28節

^{28前半}父よ、御名の栄光を現してください。」と言われた主イエスの祈りに答えて、

^{28後半}すると、天から声が聞こえた。「わたしは既に栄光を現した。再び栄光を現そう。」と、父なる神の御言葉が記されていることから明らかです。

❖ヨハネ福音書には記されていませんが、このとき、主イエス・キリストに神様の栄光が現わされたのは確実です。

「栄光」は、「輝かしい誉れ、光り輝く光栄」です。この栄光は、そこにいた群衆やギリシア人が実際にその言葉を聞き、輝く光を見たとき聖書にあります。

ヨハネによる福音書12章29節

²⁹そばにいた群衆は、これを聞いて、「雷が鳴った」と言い、ほかの者たちは「天使がこの人に話しかけたのだ」と言った。という記事がそれです。

❖主イエスご自身も、光り輝かれたでしょう。群衆の『雷が鳴った』、『天使がこの人に話しかけたのだ』という言葉が、それを現しています。群衆の反応は、神様がお与えになった栄光を、群衆が「栄光」として受けとめた。完全とは言えないまでも、たしかに人々に伝えられたと理解できます。

❖この理解を「私たち自身が与えられた」と意識できないと、この後の主イエスの言葉が言葉だけの空虚になり、ここで示されている「福音」が私たち自身と無関係になる恐れがありますので、どうか、この聖書箇所を読み返し、「わたしたち自身」の関わることに受けてください。



ヨハネによる福音書12章30～31節

³⁰イエスは答えて言われた。「この声が聞こえたのは、わたしのためではなく、あなたがたのためだ。³¹今こそ、この世が裁かれる時。今、この世の支配者が追放される。

✦ここで、主イエスは言葉を切って、少しの間黙っていたと思われます。

それは、今、ご自身が直面している困難の苦しみを自ら担い、それを、何とか人々にも伝えたい思いがあったと見えるからです。世が裁かれる時、それは同時にご自身の命が十字架で断たれる時と意識される。

その時、ここにいる人々はどうなるだろうか。神の愛、それぞれの、自分自身の信仰はどうなるのか。

ヨハネによる福音書12章32～33節

³²わたしは地上から上げられるとき、すべての人を自分のもとへ引き寄せよう。」³³イエスは、御自分がどのような死を遂げるかを示そうとして、こう言われたのである。

✦群衆はこの言葉を聞き、それぞれに思うことがある様子でざわめいた。この言葉をすぐには分からない人々もかなりいると見られる。

ヨハネによる福音書12章34節

³⁴すると、群衆は言葉を返した。「わたしたちは律法によって、メシアは永遠にいつもおられると聞いていました。それなのに、人の子は上げられなければならない、とどうして言われるのですか。その『人の子』とはだれのことですか。」



✦ユダヤ人の多くは幼い子どもの頃からラビに従って聖書(旧約)を暗唱し、特にこの時代は「イザヤ書」を良く暗唱していたとされます。

もちろん、イザヤ書自体かなり大きく、長い文章なので特定の部分は思い出せなくても当然ですが、「人の子とはだれのことですか」と聞いたのは、意図的だったのかとも考えられます。

✦イザヤ書52章14節に、

¹⁴かつて多くの人をおののかせたあなたの姿のように/彼の姿は損なわれ、人とは見えず/もはや人の子の面影はない。と記されています。

この個所は「新共同訳・旧約聖書イザヤ書」で「主の僕の苦難と死」と見出しがあり、「メシア預言」の中心的な預言とされ、多くのユダヤ人が知っているところです。

✦主イエスはこれを指摘されていません。けれども、群衆の多くは言われなくてもこのことが分かったはずです。主は「人の子とは誰？」の質問には答えられていません。

ヨハネによる福音書12章35節

³⁵イエスは言われた。「光は、いましばらく、あなたがたの間にある。暗闇に追いつかれないように、光のあるうちに歩きなさい。暗闇の中を歩く者は、自分がどこへ行くのか分からない。

✦この言葉を今日の説教の主題に掲げました。

まず、この個所の聖書の言葉を解いて話します。「光は、いましばらく、あなたがたの間にある。」ここでは、主イエスご自身でご自分を「光」と指しています。

そして、「しばらく」は、この後ご自身が捕らわれ——神殿ユダヤ教が手配した下役や、一隊の兵士——ローマ軍の駐屯兵らに捕らわれ、極刑である十字架に架けられるまで。

あるいは、その三日目に復活され、40日後に昇天されるまでをさしているとも理解されます。それは、主イエス・キリストと共に現実の歴史に刻まれている「しばらく」です。主イエスが、その間は、この世界「あなた方の間」にある。実際におられる。

ヨハネによる福音書12章36節

³⁶光の子となるために、光のあるうちに、光を信じなさい。」

「光」は、聖書の中で数多く用いられています。創世記でも、ヨハネによる福音書でも「光」は最初に現れる中心的イメージです。特にヨハネによる福音書ではこの個所でお分かりのように「イエス・キリスト」そのものをご自身で「光」と表現されている。

❖言うまでもなく、光と闇は対立するものであり、キリスト教は圧倒的に「光を良し」とし、人間そのものについても「光」を「イエス・キリストを信じる信仰の象徴」——「光にある」として用いています。

そこで「光の子」は、イエス・キリストに在る「存在の根拠をおく人間」を指しますが、単に宗教的な意味にとどまらず、光の持っている機能的・実用的意味をも適用します。

❖光は、闇の混沌に対して真理をさえ意味することがあり、光は、単なる明るさだけでなく、心理的な明るさ、理解や、発見などについても適用されており、キリスト教では「伝道」も光であり、「福音の光」とも言われます。

36節の言葉は「光」を広い意味での「イエス・キリストの存在」とすると、比較的容易に理解できるだけでなく、逆に「信仰」を「光」ととらえ、様々な出来事や、困難に出会うとき、「光の存在」を重視する在り方に通じる表現です。

❖「光のあるうちに、」を更に重ねて理解すると「信仰の根源としての光」＝「信仰をもたらす存在」が現実であり、光を放っているうちに——その光によって、光を得るという理解もあるでしょう。

物理的な「光の存在」と異なるのは「信仰の光」を受け続けると「光によって変えられそして→受けたものが「光となる」そして→「光」の存在になっていく」ことが現実にあると考えられます。

❖一定程度の規模を持つ「信仰を持つ群れ＝教会」から、—→「あらたな信仰が生まれる」「さらに信仰が与えられる」現象が実際にあるのを信仰経験豊かな人々は「理屈抜きで」知っています。

それを、教会や聖書の言葉では「聖徒の交わり」といたします。

❖聖徒の交わりは、あくまで「光＝信仰」が中心でなければ存続が難しいことです。しかし、各地の教会でこの現実が存在しています。

この現実は「イエス・キリスト、三位一体の神」に繋がっており、また「真理」につながり、信じる者を「自由」にする現実とも一体となり、光を放ちます。

わたしたちは、信仰の「光」と「真理」と「自由」に生き、光を放ちましょう。

祈り 讚美歌 (21) 502「光のある間に」



新共同訳聖書

〔ヨハネによる福音書12章27～36節〕

²⁷「今、わたしは心騒ぐ。何と言おうか。『父よ、わたしをこの時から救ってください』と言おうか。しかし、わたしはまさにこの時のために来たのだ。²⁸父よ、御名の栄光を現してください。」すると、天から声が聞こえた。「わたしは既に栄光を現した。再び栄光を現そう。」²⁹そばにいた群衆は、これを聞いて、「雷が鳴った」と言い、ほかの者たちは「天使がこの人に話しかけたのだ」と言った。³⁰イエスは答えて言われた。「この声が聞こえたのは、わたしのためではなく、あなたがたのためだ。³¹今こそ、この世が裁かれる時。今、この世の支配者が追放される。³²わたしは地上から上げられるとき、すべての人を自分のもとへ引き寄せよう。」³³イエスは、御自分がどのような死を遂げるかを示そうとして、こう言われたのである。³⁴すると、群衆は言葉を返した。「わたしたちは律法によって、メシアは永遠にいつもおられると聞いていました。それなのに、人の子は上げられなければならない、とどうして言われるのですか。その『人の子』とはだれのことですか。」³⁵イエスは言われた。「光は、いましばらく、あなたがたの間にある。暗闇に追いつかれないように、光のあるうちに歩きなさい。暗闇の中を歩く者は、自分がどこへ行くのか分からない。^{36前半}光の子となるために、光のあるうちに、光を信じなさい。」

教文館 日本語対訳ギリシア語聖書

〔ヨハネによる福音書12章27～36節〕

²⁷「今、わたしの心は騒いでいる。そして、何をわたしは言うべきか。『父よ、この時からわたしを救ってください』と言おうか。しかし、この時のために(こそ)この時にわたしは来たのです。²⁸父よ、あなたの名の栄光を現してください。」すると、天から声が来た。「わたしは栄光を現したし、また再び栄光を現わす。」²⁹そこで、(そこに)立ってそして(それを)聞いていた群衆は、「雷が鳴った」と言った。ほかの者らは言った、「天使が彼に語りかけたのだ」と。³⁰イエスは答えた、そして、言った。「この声はわたしのために聞こえたのではない、そうではなく、あなたがたのためである。³¹今や、この世に対する裁きがある。今やこの世の支配者が外に追い出される。³²そして、わたしが地から上げられるならば、すべての者を私自身のところへわたしは引き寄せる」³³そして、どんな死に方で(自分が)死のうとしているのかを、そのことを、彼は言ったのである。³⁴すると、群衆は彼に答えた。「キリストは永遠に留まると私たちは律法から聞いてた。それなのに、どうして「人の子は上げられねばならない」と、あなたは言うのか。この『人の子』とはだれであるか。」³⁵そこで、イエスは彼らに言った。「なおいしばらくの間、光はあなた方の間にある。光をあなた方が持っている間に歩め。時間があなた方を襲わないために。そして、暗闇の中に歩む者は、自分がどこに行くのかも知らない。^{36前半}光の子らになるために、光をあなた方が持っているある間に、光をあなた方は信じよ。」